



# 会報編集担当おススメの本 特集

新型コロナウイルス感染症の影響による自粛生活で、「おうち時間」を工夫して過ごした日々が続きました。読書をして過ごされた方も多かったのではないのでしょうか。友の会会報編集担当のおススメの本を紹介いたします。

本好きにはたまらない

## 『夢見る帝国図書館』

中島京子(文藝春秋)



本の題名の「図書館」に目が行く。でもその小説の内容は？

60年代後半の喜和子さんと30代でフリーライターのわたしは、上野公園の噴水前ベンチに偶然隣り合わせに座った。私は喜和子さんから話しかけられた。子供図書館の取材をしているという、喜和子さんはそこをめぐらのようにしていた時期があったと話し出す。数度会ううちに夢見る帝国図書館という題で本を書いてほしいと依頼される。喜和子さんの数奇な運命、人生が語られていく。

一方1章から25章まで夢見る図書館としてそれぞれタイトルがつけられ、図書館の変遷の史実と物語が綴られていく。図書館員が予算の少なさに嘆き、文豪たちが図書館をよく利用していた。その人々の顔まで見えるようだ。樋口一葉が、

宮沢賢治が、戦後すぐには憲法制定に関わったベアテ・シロタまでが。最後の25章では名前を聞かれた孤児が答えた。「きわこ」で終わった。うーん重い。

図書館史と、わたしと喜和子さんの話が交互に出てきて飽きさせない。帝国図書館があった上野公園一帯は元々寛永寺の敷地であった。今もひっそりと縮小されて建っている。喜和子さんが住んだ上野界隈。この小説の背景に描かれている建物や食べ物にも興味が尽きない。関東大震災や東京大空襲の時など多くの人が逃げてきて立錫の場所もなかったくらいだったという。その都度人が集まる上野のお山だった。

何度行っても上野公園には発見がある。根津、谷中も含めて文人文化の臭いがする。この本をきっかけにして上野を歩いてみるのもいい。まだ足を踏み入れたことがない国立国会図書館で友人と会うことにしている。6階食堂で図書館カレー食べようと。動機は不純。でも楽しまなければ。(一文字ひろみ)

重なる虚と実

## 『カメレオンのための音楽』

トルーマン・カポーティ  
野坂昭如訳(早川書房)



この一冊は家の本棚の最下段に30数年も置き放しだった。昭和58年の発行時は、翻訳者が野坂昭如という話題性もあり新聞に書評や広告が載った。直後に私は本屋で手にして楽しくなった。表紙は黒い背景に浮かぶ一匹のカメレオン、鮮やかな多色の背中に細長い舌の先は花の形。題名のアルファベットの文字列を樹に見立て這う姿という凝り様だった。

当時3歳と1歳児の世話に忙殺され、育児うつ気味だった私は、ポップな表紙カバーに癒しをみた思いで買った。眺めるだけで読まずにいたが、最近妙に気になりだし、何かに背を押されるように、読み始めたのだった。「カメレオンのための音楽」は仏領の島にある邸のテラスで、多人種の血をひく貴族の老婦人が、鳥にまつわる奇妙な話

敷居りの駒奴はお茶漬けを掻き込む。どちらの作品も、地に足を付けた暮らしを描いている。そして「お茶」は五感を刺激し、物語をしっかりと支えている。(長沼和子)

## エンターテインメントの神髄

### 『南国太平記』

直木三十五(角川文庫)



時は幕末、薩摩藩主をめぐる騒動は藩を二分していた。藩主島津斉興と愛妾お由羅の方は、斉興の嫡子斉彬に藩主の座を譲るまいと画策し、斉彬を迎えようとする一派と対立する。

薩摩藩江戸屋敷の床下から、斉彬の子寛之助呪殺の証拠を見つけて届け出たことにより、仙波八郎太は家老の怒りに触れ、所払いを命じられて一家離散となる。これが物語の始まりである。呪詛による調伏という設定が、この先の闇を予感させる。呪術師牧仲太郎を討つべく比叡山に入る仙波八郎太と息子小太郎。激しい切り合いの場面では、その迫力に思わず体が熱くなる。直木賞にその名を残す作者の筆は沓え渡り、心を揺する言葉、胸に突き刺さる冷酷、名僧の眼力、理不尽な切腹、成就しない愛、男の友情、飛び散る

## 亘理町出身の詩人

### 『陽気な引越し』

菅原克己(西田書店)



「東一番町、／ブラザー軒、／硝子簾がキラキラ波うち、／あ

を作家に語る短編。足元に踏めるカメレオンについて「音楽が大好きなの」という老婦人の言葉を信じかねる作家に、証明しようと客間でモーツァルトのソナタを弾き始める。すると色とりどりのカメレオンがテラスを横切って集まってくる。十数匹も。演奏を終え彼女が靴を踏み鳴らすと、たちまち逃げ去る。不思議がる作家に、その後も老婦人は鳥での怪事件や幽霊の話が続けるのだった。「うつくしい子供」は伝説の女優マリリン・モンローが、恩師の葬儀に出席した後、作家とニューヨーク市内を移動しながら、身の上話やショービジネス界の噂話をする。市内ガイドとしても面白い。訳者の野坂氏がかつて歌手としてテレビで「マリリン・モンロー、ノーリターン」と歌っていた姿を思い出し、ひととき特別な作品だったのでなどと思った。(近田裕子)

## いつもの「お茶」

### 『ひょうたん』夜鳴きめし屋』

宇江佐真理(光文社文庫)



本所北森下町、五間堀沿いに「鳳来堂」という古道具屋がある。主人の音松は定式幕で拵えた半纏を年中着ている。女将のお鈴は

たりいちめん水を嘯む音。」もうだいたい昔のこと、フォークシンガー高田渡さんが歌う「ブラザー軒」という歌を聴いた。仙台人なら知っているあのブラザー軒が舞台の歌だ。しばらくの時間が流れ、「陽気な引越し」という一冊の詩集に出会い、ページをめくるうちに、ブラザー軒の詩人とつながった。詩人の名は、菅原克己。1911年に亘理町に生まれ、十二歳で上京するまでを、宮城で過ごしている。

私の好きな作品に、隣に住む小さな男の子を題材にしたものがいくつもある。「おとなりのともりのりがきた、／元気よくドアを叩いて／たからものを見せに。／この間は／幼稚園のクレヨン画／(中略)今日は／くるなり、得意そうに／見せびらかした、／ひさ小僧のすり傷を。／誰にもないからものを／いっぱい持つてる／ちいさなものを。／はくはお前のすり傷ほど／持ち合わせがない。／この世で／お前ほど／信じられるものを持った／ためしはない。」(たからもの)

彼の詩は、暮らしの中にある一場面を切り取り、平易な言葉で表現している。しかし単にやさしい表現ではなく興行きのある風景が広がっていく。何気ない一場面を超えて新しい世界へといざなわれていく不思議さがあるのだ。持ち歩いて何度も繰り返し読みたい一冊である。(伊藤美菜子)